

黄金鳥

鈴木三重吉

青空文庫

貧乏な百ひやくしやう姓せいの夫婦がいました。二人は子どもがたくさんあって、苦しいところへ、また一人、男の子が生まれました。

けれども、そんなふううちに家がひどく貧乏だものですから、人がいやがって、だれもその子の名な附つけ親おやになつてくれるものがありませんでした。

夫婦はどうしたらいいかと、こまっています。すると、或朝あるあさ、一人のよぼよぼの乞食こじきのじいさんが、ものをもらいに来ました。夫婦は、かわいそうだと思つて、じぶんたちの食べるものを分け

てやりました。

乞食のじいさんは、二人が、へんにしおしおしているのを見て、どうしたわけかと聞きました。二人は、生れた子どもの名附親になつてくれる人がないから困っているところだと話しました。じいさんはそれを聞いて、

「では私わたしがなつて上げましょう。私だからと言つて、さきでお悔くやみになるようなことは決してありません。」と親切に言つてくれました。夫婦は、もう乞食でも何でもかまわないと思つて、一しよにお寺へいつてもらいました。

坊さんは、じいさんに子どもの名前を聞きました。じいさんは名前の相談をしておくのをすっかり忘れていました。

「そうそう。名前がまだきめてありません。ウイリイとつけましょう。」と、じいさんはでたらめにこう言いました。坊さんは帳面へ、そのまま「ウイリイ」とかきつけました。お百姓の夫婦は、いい名前をつけてもらったと言つてよろこんで、じいさんを家へつれて帰つて、出来るだけの御ちそうをこしらえて、名づけのお祝いをしました。

じいさんは別れるときに、ポケットから小さな、さびた鍵かぎを一つ取り出して、

「これをウイリイさんが十四になるまで、しまっておいてお上げなさい。十四になったら、私がいいものをお祝いに上げます。それへこの鍵がちゃんとはまるのですから。」と言いました。じい

さんはそれつきり二度と村へは来ませんでした。

ウイリイは丈夫に大きくなりました。それに大へんすなおな子で、ちつとも手がかかりませんでした。

ふた親は乞食のじいさんがおいていった鍵を、一こう大事にしないで、そこいらへ、ほうり出しておきました。それをウイリイが玩具おもちゃにして、しまいにどこかへなくして来しました。

ウイリイはだんだんに、力の強い大きな子になって、父親の畠はたけ仕事を手伝いました。

或ときウイリイが、こやしを車につんでいますと、その中から、まっ赤かにさびついた、小さな鍵が出て来しました。ウイリイはそれを母親に見せました。それは、先せんに乞食のじいさんがおいて行つ

た鍵でした。母親はじいさんの言ったことを思い出して、はじめで、ウイリイに話をして聞かせました。それから、ウイリイはその鍵をいつもポケットにしまつて、大事に持つていました。

そのうちに、ウイリイの十四の誕たんじょう生しょうが来きました。ウイリイは、その朝早く起きて窓の外を見ますと、家の戸口うちぐちのまん前に、昨日きのうまでそんなものは何なんにもなかつたのに、いつのまにか、きれいな小さな家いえが出来ていました。ふた親もおどろいて出て見ました。上から下まできれいな彫り飾りがついたりして、ウイリイたちのぼろぼろの家と比べると、小さいながら、まるで御殿のように立派な家でした。

ところが、その家には窓が一つもなくて、ただ屋根の下、高

いとところに戸口がたった一つついてるきりです。その戸口には錠じょうがかかっています。双親ふたおやは、どうしてこんな家がひよっこり建ったのだろうとふしぎでたまりませんでした。ウイリイは、「これはきつといつかのおじいさんが私にくれた贈物にちがいない。」こう言つて、ポケットから例の鍵を出して、戸口の鍵かぎ穴あなへはめて見ますと、ちようどぴつたり合つて、戸がすらりと開あきました。

ウイリイはすぐに中へはいつて見ました。すると、その中には、きれいな、小さな灰色の馬が、おとなしく立っていました。ちやんと立派な鞍くらや手綱たづながついていて、そのまま乗れるようになってるのです。そのそばの壁には、こしらえたばかりの立派な服が、

上^{うえ}下^{した}そろえて釘^{くぎ}にかけてありました。

ウイリイは、さつそく、その服を着て見ました。そうすると、まるで、じぶんの寸法を取ってこしらえたように、きつちり合いました。それから、馬に乗って、あぶみへ両足をかけて見ますと、それもちやんと、じぶんの脚^{あし}の長さ^{あし}に合っています。

ウイリイは、そのまま世の中に出て、運だめしをして来たくなりました。それですぐに双親にそのことを話して、いさんで出ていきました。

ウイリイはどんどん馬を走らせていきました。するともうかなり遠くへ来たと思うときに、馬がふいに、口をきいて、

「ウイリイさん、お腹が減なかつたら私わたしの右の耳の後うしろへ手をおあてなさい。のどがかわいたら私の左の耳の後をおさわりなさい。」と、人間の通りの言葉でこう言いました。ウイリイはびっくりして、

「おや、お前は口がきけるのか。それは何より幸さいわいだ。」と喜びました。そればかりか、耳にさえさわれば食べるものや飲むもの、すぐにどこからか出て来るというのですから、これほど便利なこととはありません。

ウイリイは、馬を早めて、丘や谷をどんどん越して、しまいに大きな、涼しい森の中へはいりました。そして、馬の息を休める

ために、ゆっくり歩きました。

そのうちにウイリイは、ふと、向うの方に何かきらきら光るものが落ちているのに目をとめました。それは金のきんのような光のある、一まいの鳥の羽根はねでした。ウイリイは、めずらしい羽根だからひろっていいこうと思って、馬から下りおようとししました。すると馬が止めて、

「いけません。ほうっておきなさい。それをおひろいになると大へんなことがおこります。」と言いました。ウイリイはそのまま通り過ぎました。

ところが、しばらくいくと、同じような金色に光る羽根がまた一本おちています。こんどのは前のよりも、もっときらきらした、

きれいな羽根でした。

ウイリイは馬から下りて、ひろおうとしました。そうすると馬がまた、

「そつとしておおきなさい。それを拾うと、あとで後悔しなければなりませんよ。」と言いました。で、またそのままにして通りすぎましたが、しばらくするとまた一本、前の二つよりも、もつときれいなのが落ちていました。馬はやっぱり、

「およしなさい、およしなさい。」と言いました。

「私のいうことをお聞きなさい。悪いことは言いません。」

こう言ってしきりにとめました。ウイリイはほしくてくたまらないものですから、馬のいうことを聞かないで、とうとう飛

び下りてひろいました。すると、その一本だけでなく、ついでに前のもみんなひろっていきたくなりました。ウイリイはわざわざ後あともどりをして、三本ともすっかりひろいました。

その羽根はほんとうに不思議な羽根でした。一本々々見ると、みんな同じように金色に光っているのですが、三本一しよにならべると、女の顔かを画えいた一まいの画えになるのです。それこそ、この世界じゅう中で一ばん美しい女ではないかと思われるような、何ともいえない、きれいな女の画え姿すがたです。ウイリイはびっくりして、その顔を見つめました。

ウイリイはやつと、その羽根をポケットにしまって、また馬を走らせました。そしてどこまでもどんだんかけていきますと、し

まいに或^{ある}大きなお城の前へ来ました。馬は、

「これが王さまのお城です。ここへはいつて家来^{けらい}にしてもらいなさい。」と言いました。ウイリイは、すぐに、王さまのうまやの頭^{かしら}のところへいつて、

「どうか私を使つて下さいませんか。」とたのみました。

「ただ私の馬のかいばさえいただきませば、給料などは下^{くだ}さらなくともたくさんです。」と言いました。そして馬丁^{ばてい}にやつてもらいました。

ウイリイはうまや頭^{がしら}からおそわつて、ていねいに王さまのお馬の世話をしました。じぶんの馬も大事にしました。そして、しばらくの間なにごともなく、暮していました。

ウイリイは厩うまやのそばに、部屋をもらっていました。夕方仕事ですみますと、ウイリイはその部屋へかえって、いつも窓をぴしりしめて、例の三本の羽根をとり出しました。羽根は、お日さまのように、きらきら光るので、部屋の中が昼のように明るくなりました。

ウイリイは、その部屋の中の美しい女の人の顔を、每晚紙へ画かき取りました。しかしなかなか思うように上じょうず手てにかけなくて、たんびにいく枚もくかき直しました。

一たい厩の建物では、夜もけつして灯あかりをつけないように、きびしくさし止めてありました。それで、ウイリイはいつでも窓をかたくしめておくのですが、それでもしまいには、だれかが、そ

ここに灯がついているのを見つけて、うまやがしら 厩頭の役人に言いつけました。

厩頭は自身でたしかめにいききました。そうすると、ほんとうにウイリイの部屋から灯がもれていました。

ウイリイは、人が来たのを感じいて、急いで羽根をかくしました。それで厩頭がはいって来たときには、部屋の中はまっ暗になつていました。

厩頭は画かきかけの画えを取り上げていききました。

あく翌る日、厩頭は王さまのところへ行つて、ウイリイのことを訴えました。どんな灯をつけるのかそれはわかりませんが、とにかくその灯でこんな画を画いておりましたと言つて、取つて来た画

をお目にかけました。王さまは、すぐにウイリイをお呼びになつて、

「これはどうした画か。」とお聞きになりました。

わたくし

「私が画きましたのでございます。」とウイリイが申しました。

王さまは重ねて、

「まだほかにもあるか。」とお聞きになりました。ウイリイは正直に、まだいくまいもございませうと言つて、ほかのもみんな持つて来てお目にかけました。

御覧になると、すべてで三十枚ありました。それがみんな同じ一人の女の顔を画いた画ばかりでした。その中で、一ばんしまいかいたのが一ばんよく出来ていました。王さまは、

「これは何から写したのか。お前は灯はともさないといい張るそ
うだが、暗くらがりて画がかけるのか。」とお聞きになりました。

ウイリイは仕方なしに、羽根のことをすつかりお話ししました。
すると王さまは、その羽根を見せよと仰おつしやいました。

王さまはウイリイが言ったように、羽根を三枚ならべて、まん
中に見える女の顔をごらんになると、びっくりなすつて、

「これはだれの顔か。」とお聞きになりました。ウイリイは自分
でも知らないのですから、だれの顔だとも言うことが出来ません
でした。

そうすると王さまは、

「お前はわしに隠しだてをするのか。それではわしが話してやろ

う。これはこの世界中で一ばん美しい王女の顔だ。」とお言いになりました。

王さまは今ではよほど年を取ってお出でになるのですが、まだこれまで一度も王妃おうひがおありになりませんでした。それには深いわけがありました。王さまは、お若いときに、よその国を攻めほろぼして王をお殺しになりました。その王には一人の王女がありました。王さまは、それを自分の王妃にしようとなさいました。そうすると、王女はこっそりどこかへ遁にげてしまつて、それなり行く方ゆえがわからなくなりました。王さまは方々ほうほうへ人を出してさんざんお探しになりましたが、とうとうしまいまで見附みつかりませんでした。王さまはその王女でなくてはどうしてもおいやなので、

それなり今日まできょうだれもおもらいにならないのでした。

ところが、今ウイリイの羽根を見てびっくりなすつたのもそのはずです。羽根の中の画顔えがおは王さまが今まで一日もお忘れになることが出来なかつた、あの王女の顔でした。

王さまはそのことをウイリイにお話しになりました。そして、「お前はこの画顔を持っているのだから、王女のいどころを知っているにちがいない。これからすぐに行つてつれて来い。」とお言い附けになりました。

ウイリイは、この羽根はただ森の中に落ちていたのを拾つたのですから、そういう王女がどこにお出いでだか、私は全まるで知らないのですと、ありのままを申し上げました。けれども王さまはお聞

き入れにならないで、ぜひともつれて来い、それが出来ないなら、この場でお前を斬きつてしまおうとお言いになりました。

ウイリイは、殺されるのがこわいものですから、仕方なしに、それでは探しにまいつて見ましようとお返事をしました。

三

ウイリイは厩うまやへかえつて、自分の、灰色の小さい馬に、王さまがこんな無理なことをお言いになるが、どうしたらいいだろうと相談しました。

「それはあなたが一ばんはじめに拾った羽根のたたりです。私が

あれほど止めたのに、お聞きにならないから。」と馬が言いました。

「第一、その王女はまだ生きておいでになるのだろうか。」

「御心配には及びません。私がちやんとよくして上げましょう。」と馬が言いました。

「王女は全く世界中で一ばん美しい人にそういありません。今でもちやんと生きてお出いでになります。けれども世界の一番んはての遠いところにおいでになるのです。そこまでいくには第一に大きな船がいります。それも、すっかりマホガニイの木でこしらえて、銅の釘くぎで打ちつけて、銅の板でくるんだ、丈夫な船でないと、とても向うまでいく間持あいだちません。」と馬は言いました。

ウイリイは王さまのところへ行つて、そういう船をこしらえていただくようにおたのみしました。

王さまは、さつそく役人たちに言いつけて、こしらえて下さいました。それにはずいぶん沢山の日数ひかずがかかりました。

ウイリイは馬のところへ行つて、船が出来たと知らせました。そうすると馬は、

「それでは王さまにお願いして、肉とパンとうじ虫を百樽たるずつ用意しておもらいなさい。そのほかにその樽を二つずつはこぶ車が百だい、その車を引っぱる革綱かわづなも二百本あります。それから水夫を二百人集めておもらいなさい。」と言いました。

ウイリイはそれをすっかりととのえてもらつて、船へつみこみ

ました。二百人の水夫も乗りこみました。馬は、

「もうこれでいいから、しまいに大麦を一俵わたし私に下さい。そしてこの手綱たづなをゆるめておいて、すぐに船へお乗りなさい。」と言いました。

ウイリイは馬のいうとおりにして、船へ乗りました。そして今にも岸をはなれようとしていますと、馬は、ふいに白いむく犬になつて、いきなり船へ飛び乗り、ウイリイの足もとへしやがみましました。ウイリイはこれから長い間、海や岡をいくのにちようどい友だちが出来たと思つて喜びました。

船は追手おいての風で浪なみの上をすらすらと走つて、間もなく大きな大お海おうみの真中まんなかへ出ました。

そうすると、さっきのむく犬が、用意してある百樽のうじ虫をみんな魚におやりなさいと言いました。ウイリイはすぐに樽をあけて、うじ虫をすつかり海へ投げこみました。犬は、その空樽あきだるを鯨におやりなさいと言いました。ウイリイはそれも片はしからなげてやりました。

魚さかなたちは、思わぬ御馳走ごちそうをもらったので、大よろこびで、みんなで寄って来て、おいしい〜と言って食べました。鯨もすつかり出て来て、樽を一つずつひろって、それをまりにして、大よろこびで遊びました。

船は、それから、どんく〜どんく〜どこまでも走って、しまいに世界のはての陸地へつきました。

ウイリイは船から上ると、百だいの車へ、百樽の肉とパンとをつませて、二百本の革綱ぼんをつけてそれを二百人の水夫に、二人ずつで引かせて進んでいきました。

すると、向うの方で、大ぜいの狼おおかみと大ぜいの熊くまとが食べものに飢かつえて大げんかをしていました。みんなが牙きばをむき爪つめを立ててかみ合いかき合っているのです、ウイリイたちはそこをとおることができませんでした。

ウイリイはそれを見て車から百樽の肉を下おろして投げてやりました。みんなは喜んですぐにけんかをやめてとおしてくれました。

それからまたどんどんいきますと、今度はおおぜいの大男が、これも食べものに飢かつえて、たった一とかたまりのパンを奪い合っ

て、恐ろしい大げんかをしていました。ウイリイは気をきかせて、すぐに百樽のパンをやりました。大男たちは大そうよろこんで、ぺこぺこおじぎをしました。

「私たちはちようど百年の間けんかをしていたのです。おかげでやっと食べものが口にはいります。このお礼にはどんなことでもいたしますから、御用があたりでしたら仰おつしやつて下さい。」と言いました。

ウイリイはそこから水夫たちをみんな船へ帰して、今度は犬と二人きりで進んで、いきました。

そうすると、ずっと向うの方に、きれいなお城がきらきらと日に光っていました。犬は、

「このへんでしばらく待っていていらつしやい。あのお城のぐるりには毒蛇どくじやと竜りゆうが一ぱいいて、そばへ来るものをみんな殺してしまします。しかし、その毒蛇も竜も、日に中ちゆう一ばん暑いときに三時間だけ寝ますから、そのときをねらつて、こつそりとおりにぬければ大丈夫です。」と言いました。ウイリイはそのとおりにして、犬と一しよに、無事に城の中へはいりました。

城の門も、中の方々の戸も、すっかり明け放してありました。

四

ウイリイは犬を外に待たせておいて、大きな部屋をいくつも通

りぬけて、一ばん奥の部屋にはいますと、そこに、金色をした鳥が一ぴき、すやすやと眠っていました。その鳥の羽根は、ウイリイが先にひろった羽根と同じ羽根おんなでした。ウイリイは、犬から教わおそっていたので、そつとその鳥のそばへ行つて、しつぽにしている、一ばん長い羽根を引きぬきました。

鳥はびつくりして目をあけたと思うと、ふいに一人の美しい王女になりました。それが羽根の画の王女でした。

「あなたは私の熊と狼のそばをよくとおりぬけて来ましたね。」と王女が言いました。

「肉をどつきやりましたら、とおしてくれました。」とウイリイは答えました。

「それでは私の大男のいるところは どうしてとおりにぬけたのです。
 」と王女は聞きました。

「パンをどっさりやりました。」

「毒蛇と竜の前は？」

「みんなが寝ているときにとおりました。」

「あなたは一たい何なんのためにここへ来たのです。」

「じつは私わたくしの王さまが、ぜひあなたを王妃にしたいとおおつしや仰いますの

で、はるばるお迎いにまいりましたのです。どうか私と一しよに
 いらっして下さいまし。」とウイリイは言いました。王女は、

「それでは明日あす一しよに立ちましよう。しかし、とにかく、あち
 らへいって御飯をたべましよう。」と言いました。ウイリイは、

王女の^{あと}後について立派な大きな広間へとおりました。そこには、ちやんといろんな御ちそうのお皿^{さら}がならんでいました。

ウイリイは犬からよく言われて来たので、一ばんはじめの一皿だけたべて、あとのお皿へはちつとも手をつけませんでした。

御飯がすむと、王女は方々の部屋々々を見せてくれました。何を見てもみんな目がさめるような美しいものばかりでした。けれども、ふしぎなことには、これだけの大きなお城の中に、さつきまで鳥になっていたこの王女のほかには、だれひとり人がいませんでした。

王女は、しまいに立派な寝室へつれて行って、

「ここにある寝台^{ねだい}のどれへなりとおやすみなさい。」と言いまし

た。ウイリイはそれをことわって、門のそばへいって犬と一しよに寝ました。

あくる朝、ウイリイは王女のところへ行つて、

「どうぞ一しよにお立ち下さいまし。」とたのみました。王女は、「いくにはいくけれど、それより先に、ちよつとこの絹糸のかせの中から、わたくし私を見つけ出してごらん下さい。」

こういつて、じきそばのテーブルの上に、色んな色の絹糸のかせがつんであるのを指したかゆびさと思つと、いきなり姿を消してしまいました。

ウイリイはちゃんと犬から教わっているので、ほかのかせよりこころもち心持色の黒いのをより出し、ポケットからナイフを出して、

そのかせを二つにたち切ろうとしました。そうすると、王女はあわてて姿をあらわして、

「それを切られると私の命がなくなります。よして下さい。」とたのみました。

王女は、それから、ウイリイをもう一度昨日きのうの広間へつれて行って、一しよに御馳走を食べました。ウイリイは犬から言われているとおりを守って、今度は一ばんしまいのお皿だけしか食べませんでした。

王女は、しまいにまた昨日のように、寝室の寝台のどれかへおやすみなさいとすすめました。ウイリイは、やはりそれをことわって、犬と一しよに門のそばへ寝ました。

そのあくる朝、ウイリイは、

「今日きょうはどうか一しよに立って下さいまし。」と王女に言い
ました。王女は、

「では、その前にこのわらの中から私をさがし出してごらんさ
い。」と言って、一たばのわらの中へ体をかくしてしまいました。
ウイリイはその中からほかのよりも少し軽いわらしびをより出し
てまたナイフで切るまねをしました。王女はびっくりして姿を現
わして、

「そのわらを切られると私の命がなくなるのですから。」と言っ
てあやまり、

「それでは、もういきましよう。」と言いました。

王女は部屋々々の戸へ一つ一つびと鍵かぎをかけて廻まわりました。それから一ばんしまいに、入口の門へも錠じょうまえ前おろを下しました。そして、それだけの鍵をみんな持って、ウイリイと一しよにお城を立ちました。

二人は長い長い道を歩いて、やっと海うみへ着きました。船はすぐに帆を上げて、もと来た大おお海うみへ引きかえました。王女はその途中で、お城から持って来た鍵のたばを、人に知れないように、海の中へなげすてました。犬はそれを見て、こつそりとウイリイに話しました。

ウイリイはすぐに魚にたのんで、鍵をさがしてもらいました。魚たちは、いきがけにうじ虫をたくさんごちそうしてもらったも

のですから、そのお礼に、みんなで一しようけんめいに海の底をさがしました。

けれどもひろいひろい海ですから、なかなか見つかりませんでした。魚たちは血眼ちまなこになって走りまわりました。そして、やつとしまいにのこぎり魚うおが鍵のたばを口にくわえて出て来ました。

鍵は海の底の岩と岩との間へ落ちこんでいたのでした。のこぎり魚はそこへ無理やりに首を突つこんで引き出したものですから、すつかりあごをいためてしまいました。ですからその魚のあごは、今だに長短ながみじかになっています。

ウイリイはその鍵を受取つて、王女に知られないようにかくしておきました。

船は長い間かかってようようもとの港へ着きました。

王さまは王女をごらんになって、大へんにおよろこびになりました。王女は年も美しさも、そっくりもとのままでした。

王さまはすぐに王女と御婚礼をしようとなさいました。ところが王女は、自分のお城を王さまの御殿のそばへ持って来てもらわなければいやだと言ひ張りました。王さまはウイリイをお呼びになつて、

「お前はなぜ、ついでにお城を持ってかえらなかつたのか。これから行つてすぐに持つて来い。それでないとお前の命を取つてしまふぞ。」

こう言つてお怒りおこになりました。ウイリイは困つてしまつて、

うまやへ帰って自分の小さな馬に言いました。

「あの大きなお城がどうしてここまで持つて来られよう。私はもういつそ殺してもらった方がましだと思う。それに、あんな年取った王さまが、あの若い美しい王女をお嫁にしようとなさるのだから、王女がおいたわしくてたまらない。殺されてしまえばそういうことも見ないですむから、ちようど幸さいわいだ。」

こう言つて、しよんぼりしていました。馬はそれを聞いて、

「これはあなたがあの二番目の羽根を拾ったばかりです。しかし今度も私がよくして上げましょう。これからすぐに王さまのところへ行つて、この前のような船と、同じ人数にんずの水夫と、それからうじ虫と肉とパンと車と革かわづな綱ななを、先せんのとおりに用意しておもらい

なさい。」と言いました。

ウイリイはその仕度したくがすっかり出来ますと、すぐに犬と一しよに船へ乗つて出ていきました。やはり前と同じように、魚たちはうじ虫をもらい、鯨は空樽あきだるをもらいました。それから狼おおかみと熊は肉を、大男たちは、パンをもらいました。ウイリイはその大男をつれて王女のお城へいきました。お城は日の光を受けてきらきら光っていました。

大男は、みんなでそのお城をかついで、ぞうさもなく海ばたまで持つて来ました。そうすると、そこへ鯨がみんなで出て来て、それを背中へのせて、向うの港まではこんでいって、王さまの御殿のそばへおし上げました。王さまは、もうこれで御婚礼が出来

ると思つてお喜びになりました。そうすると王女は、

「せつかくお城がまいりましたが、部屋の戸がみんなしまつていますから何の役にも立ちません。その鍵は私がこちらへまいります途中でなくしてしまいました。あの部屋が開かないうちは御婚礼をするわけにはまいりません。」

こう言つてことわりました。王さまは、

「それはどうさもないことだ。すぐに鍵をこしらえさせよう。」
 と言つて、急いで上手な鍛冶屋かじやをおよびになりました。けれどもその鍛冶屋には、第一、お城の門の錠前にはまる鍵がどうしても作れませんでした。しまいには国中の鍛冶屋という鍛冶屋がみんな出て来ましたが、だれ一人その鍵をこしらえるものがありません

んでした。

王さまは仕方がないので、また、ウイリイをお呼びになつて、「あの門と部屋々々の戸を開けてくれ。すぐに開けないとお前の命はないぞ。」とお言いになりました。

ウイリイは自分がちゃんとその鍵を持っているのですから、今度はずつとも困りませんでした。

五

王女は、門や部屋がすっかり開いたので、もう御婚礼をするかと思ひますと、また無理なことを言い出しました。

「ではついででございませうから命の水を一とびんと死の水を一とびんほしゆうございます。それを取りよせて下さりましたらもう御婚礼をいたします。これまでのことをみんな聞いていただきましたのですから、どうかこれもかなえていただきとうございます。」と言いました。

王さまはまたウイリイをお呼びになつて、命の水と死の水を持つて来い、それが出来なければすぐに命を取つてしまふとお言いになりました。ウイリイはうまや廐へ行つて、

「私は今度こそはもういよいよ殺されるのだ。だれにくびをしめられるのか知らないが、もうそんなことはどうでもかまわない。」
 こう言つて自分の馬にお別れをしました。馬は、

「それはあの三本目の羽根を拾ったたたきです。私があれば止めてもお聞きにならないから、こんなことになったのです。しかももう一度どうにかして上げますから、王さまに銀のびんを二つもらってお出いでなさい。」と言いました。

ウイリイは銀のびんをもらって来て、馬のさしずどおりに、一つへ命の水という字を彫らせ、もう一つへは、死の水という字を彫らせました。

「それでは早く鞍くらをおおきなさい。」と馬が言いました。ウイリイは間もなく馬に乗って大急ぎで出ていきました。そのとき窓のところところに立って見ていた王女は、

「そのたすけ手がついていけば、きっと見附かります。」とウイ

リイに言いました。ウイリイは山や谷をいくつもく越して、しまいに、遠くの知らない国の、或ある大きな森へ来しました。

馬はその森の中の大きな木の下へウイリイを下おろしました。その木の上には鳥からすが巢をつくっていました。馬はウイリイに、おやがら親鳥すが立つて出るまで待つていて、その留守るすに木へ上のぼつて、巢すにいる子鳥を一ぴき殺して、命の水を入れるびんを、そつと巢の中に入れておくように教えました。

ウイリイはそのとおりにしてびんを入れて下おりて来て、じつと見ていました。そのうちに親鳥がかえつて来しました。親鳥は子鳥が一ぴき死んでいるのを見ると、いきなりそこにあるびんをくわえて、大急ぎでどこかへ飛んでいきました。それから、間もなく

かえつて来て、びんの中の水を死んだ子鳥の体へふりかけました。すると子鳥はすぐに生きかえりました。

ウイリイは急いで巢へ上^{あが}つて、親鳥を追いのけて、びんを取つて来ました。その中には、まだ水が半分残っていました。馬はそのつぎにウイリイに、そう言つて、蛇^{へび}を一ぴきつかまえて来^こさせました。蛇は頭をなでてやればかみつきはしないから、それを死の水のびんと一しよに、鳥の巢の中へ入れておきなさいと言いました。ウイリイはびんと蛇を持って上^{のぼ}つていきました。そうすると、親鳥が、またそのびんをくわえて、大急ぎでどこかへ飛んでいきました。

親鳥は間もなく帰つて来て、びんの水を蛇へふりかけました。

蛇はすぐに死んでしまいました。ウイリイは急いで、木へ上つて、親鳥を追いのけて、びんを取つて来ました。今度のびんには、水がまだよつぽどたくさん残っていました。

ウイリイはその二つのびんをかかえて、馬を飛ばしてかえりました。

王女は、もう今度はどうしても御婚礼をしなければなりません。しかしその前に、二つの水がほんとうにきき目があるかどうか、ためして見ていたきたいと言いました。けれども、だれ一人殺されて見ようというものがいないので、王さまは、またウイリイをお呼びになつて、これはお前が持つて来たのだから、きくかきかないか、お前がためして見るのがあたり前だとお言い

になりました。王女はすぐに死の水のびんを取って、ウイリイの体へふりかけました。ウイリイは、たちまち死んでしまいました。王女は、つぎに命の水をその死骸しがいへふりかけました。そうするとウイリイはすぐに生きかえって、今までのウイリイとはちがってまぶしいほど美しい男になって起き上りました。王さまはそれをごらんになって、じぶんもそういうふうにならうと美しくなりたいとお思ひになり、

「では、わしも一度死んで生きかえりたい。」とお言ひになりました。

王女は仰おほせを聞いて、さつそく、死の水を王さまにふりかけて、それから、命の水をかけて生きかえらせてお上げしました。王さま

まはよくばつて、その上もつと美しくなりたいとお思いになり、もう一度死なしてくれとお言いになりました。

王女はまた死の水をふりかけました。ところが今度命の水をかけようと思ひますと、もう水が一ひとせずくもありませんでした。

「おやおや、これではもうどうすることも出来ません。」と王女は言いました。王さまは、とうとうそれなり、ほんとうの死骸になつておしまいになりました。

そうになると、だれかあとをつぐ人がいりました。王女は、

「それは、ウイリイさんよりほかにはだれもありません。私を鳥からもとの人間にして、あんな遠い遠いところからつれてかえつたり、あんな大きなお城をここまで持つて来たり、命の水や死の

水を取って来たりするようなことが、ほかのだれに出来ましよう。こんなえらい人が王さまにおなりなるのに何なんのふしぎもありません。」と言いました。ほかの人たちは、王女が手に持っているびんの中に、まだ死の水が残っているので、それにおそれて、だれ一人王女にさからうものもありませんでした。ですから、ウイリイはとうとう王さまになりました。世界中で一ばん美しい王女は、よろこんでウイリイの王妃になりました。

その御婚礼の日に、ウイリイは、小さな灰色の馬のところへ行つて、みんなお前のお蔭かげだと言つてよろこびました。馬は、

「それでは今度は私のおねがいを聞いて下さい。どうか剣をぬいて、私の首を切つて、それをしつぽのそばにおいて、三べんお祈

りをして下さい。」とたのみました。ウイリイはびっくりして、「お前を殺すなぞということが、どうして私に出来よう。」と言いました。

「でもそれが私の仕合せしあわになるのです。けっして悪いことにはなりません。どうか私のいうとおりにして下さい。」と、馬はくりかえしてたのみました。ウイリイは仕方なしに、剣をぬいて、馬の首を切り落しました。そしてその首をしっぽのそばにおいて、三べんお祈りをしますと、今まで馬の死骸だと思つたのが、ふいにけだか気高い若い王子になりました。それは王女のお兄さまあにいまでした。王子は今まで魔法にかかつて、永ながい間馬あいだになつていたのでした。二人は大よろこびをして、たがいに手を取つて御殿へはいりま

した。王女のよろこびも、たどえようがないほどでした。

めでたい、御婚礼のお祝いは、にぎやかに二週間つづきました。ウイリイ王と、王妃とは、お兄さまの王子と三人で、いついつまでも楽しくくらししました。

青空文庫情報

底本：「鈴木三重吉童話集」岩波文庫、岩波書店

1996（平成8）年11月18日第1刷発行

底本の親本：「鈴木三重吉童話全集 第一卷」文泉堂書店

1975（昭和50）年

初出：「世界童話集 第一編『黄金鳥』」春陽堂

1917（大正6）年4月

入力：土屋隆

校正：noriko saito

2006年4月29日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

黄金鳥

鈴木三重吉

2020年 7月12日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>